仮面ライダーW&ＴＩＧＥＲ&ＢＵＮＮＹ

フルフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーＷ＆ａｍｐ；ＴＩＧＥＲ＆ａｍｐ；ＢＵＮＮＹ

【Ｎコード】
Ｎ７９７５Ｚ

【作者名】
フルフル

【あらすじ】
風の吹く街・風都。
その風都を守るヒーローとして活動する戦士。
仮面ライダーＷ。
Ｗは風都で起こる怪現象を探っていた。
「同じ人物が複数あらわれる」
という現象だ。
そして捜査を続けるうちにあるドーパントにたどり着く。
「パラレルワールドドーパント」

平行世界の記憶を封じたガイアメモリだ。

悪の蔓延る街・シュテルンビルト。
そのシュテルンビルトを守るヒーローとして活動する戦士。
ワイルドタイガー。
シュテルンビルトでは過去にない大事件が起きていた。
「複数のバーナビーが悪事を働いている」
というありえない事件だ。
タイガーは捜査を続け、あるＮＥＸＴにたどり着いた。
「アルネイト・ライナス」
その能力は「普通ではない能力をコピーできる」能力だ。

そして、数々の偶然が重なり、２人は出会ってしまう。

「仮面ライダーＷ、ハードボイルドに行くぜ！」

「ワイルドタイガー、ワイルドに吠えるぜ！」

時空を超えて闘うヒーロー。

始まります。

～現れたE／平行世界のライダー～（前書き）

ダブルとタイガーのクロスオーバーとなります。

時空を超えて、とかは有り触れてるかもしれませんが。

よろしく願います。

～現れたE／平行世界のライダー～

?仮面ライダーWの次元?

場所は風の吹く街・風都。

その街にある一つの探偵事務所。

ドアを開ければ２０畳ほどの空間に、センスを感じるインテリア。

数個の帽子のかかる隠し扉、タイプライターの置かれたデスク。

そんな鳴海探偵事務所で、２人の人間が口論を交わしていた。

「いい加減にしろ！お前も探偵なら手掛かりの一つくらいさっさと見つけろ！」

青いジャケットを着た、若い青年が叫んだ。

彼の名は照井竜。

風都署の警察で、仮面ライダーアクセルとして風都を守る戦士だ。

「そっちこそ！警察の方が得られる情報は多いだろうが！」

ネクタイに黒いハット帽子をかぶった青年も声を上げた。

彼の名は左翔太郎。

この鳴海探偵事務所の探偵であり。

仮面ライダーダブルとして風都を守る戦士。

現在、２人はある事件の情報交換を行なっていたのだが。

お互いが殆ど有力な情報を得られなかったために言い争いが起きていた。

２人の追いかけるある事件とは「同一人物が同時刻にあらゆる場所で見かけられる」

という奇っ怪な事件だ。

２人はこの事件にガイアメモリが絡んでいると確信し、独自に捜査を行なっていた。

そして現在に至る。

「フィリップの検索はどうした？」

「今も検索中だ、だが手掛かりが少なすぎて絞りきれねえみたいだ」

フィリップというのは翔太郎の相棒である。

「そうか・・・だがガイアメモリが関わっているのは確実だな」

「ああ、じゃなきゃ同じ人間が何人も現れるなんて有り得ねえ」

「俺は署に戻る。引き続き捜査を頼むぞ、左」

「任せとけ」

そう言うと照井はドアに手をかけ、出ていこうとしたが。

「失礼するぜ」

ドアの向こうから誰かの声が聞こえた。

そして照井がドアを開くより先に、向こうから開いた。

「っ・・・・・・貴様っ！」

照井は声の主に掴みかかろうとした。

「おっと」

声の主は軽々と照井をかわし、事務所内に入った。

その人物は照井も翔太郎も知る人物だった。

「よう、過去の仮面ライダー達」

声の主はそう言うと、腰にロストドライバーを当てた。

「お前は・・・・大道克己・・・・・・っ！」

大道克己。

不死の兵士ＮＥＶＥＲとして改造された不死身の男。

ある事件で「エターナル」のガイアメモリを手に入れ、仮面ライダーエターナルとして闘った。

そして最後は風都で大事件を起こし、ダブルとの決戦の後に消滅した。

つまり、今目の前にいるということは有り得ないことだ。

「お前、どうしてここにいるんだ・・・・・・」

翔太郎は克己を倒した張本人なのだ。

当然の疑問と言えるだろう。

「どうでもいいだろ？そんなことは」

そう言い終えた克己は懐から何かを取り出した。

それは「エターナル」のＴ１ガイアメモリだった。

〜ＥＴＥＲＮＡＬ！〜

永遠の記憶を封じたガイアメモリだ。

ガイアメモリのボタンを押し、ガイアウィスパーから音声が流れた。

「変身」

〜ＥＴＥＲＮＡＬ！〜

ガイアウィスパーの音声と軽快な音楽と共に、克己の身体が白い装甲で包まれた。

「仮面ライダー・・・エターナル」

克己は変身後にそう名乗った。

翔太郎は目の前の克己が本物であることを確信した。

「左！何をボーッとしている！」

照井もアクセルドライバーを腰に当てた。

ベルトが腰に装着され、懐から紅いガイアメモリを取り出した。

そしてボタンを押し、ガイアウィスパーから音声が流れる。

〜ＡＣＣＥＬ！〜

加速の記憶を封じ込めたガイアメモリ。

「変・・・身っ！」

〜ＡＣＣＥＬ！〜

ガイアメモリの音声とエンジン音のような音楽が流れる。

そして照井は紅い装甲に包まれ、仮面ライダーアクセルとなった。

「地獄から迷いでたかっ！」

アクセルは大型の剣、エンジンブレードでエターナルに切りかかった。

「見せてみろ、この世界の過去のライダー」

エターナルはブレードを身軽に交わし、窓を突き破り外に出た。

この世界の・・・？

翔太郎はその言葉に疑問を抱いた。

そして、場所は工場跡。

「ハアっ！」

アクセルはエンジンブレードを力の限り振り回す。

エターナルは体技を駆使して、かわすか、受け止めるか。

とにかく防御に徹していた。

「いい感じだ。もっとこい」

挑発するかのようにアクセルに手招きをするエターナル。

「舐めるなっ！」

すると、アクセルは少し形の異なる黒いガイアメモリを取り出した。

〜ＴＲＩＡＬ！〜

挑戦の記憶を内蔵したトライアルメモリだ。

「変・・・身っ！」

〜ＴＲＩＡＬ！〜

カウントダウン音声の後にバイクのスリップ音のような音楽が響いた。

そしてアクセルの紅い装甲が弾け、黄色に。

そして青色に変化し、スリムな体型のライダーに変わった。

この超高速形態こそがアクセルトライアルだ。

「ほう・・・？面白いっ！」

エターナルは今度は攻撃に転じた。

小型ナイフのような形の武器、エターナルエッジを構えて切りかかる。

しかし、超高速で移動するアクセルトライアルには掠りもしない。

「そんなものが当たるかっ！」

アクセルはトライアルメモリの形を変化させた。

｛ＴＲＩＡＬ！ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ！｝

マキシマムドライブとはガイアメモリの力を最大限引き出す事である。

ストップウォッチ形に変化させたトライアルメモリのスタートボタンを押した。

「ハアアアアアっ！」

超高速で繰り出す幾発もの蹴りをエターナルに浴びせる。

少なくとも、目で追える速度ではない。

そして、数秒後にトライアルメモリのストップボタンを押した。

「９，９秒。それがお前の絶望までのタイムだ」

それと同時に蹴りを止めた。

そしてエターナルは大爆発を起こした。

だが。

「一体どういうことだ・・・」

アクセルトライアルは倒したはずのエターナルに向き直った。

「いい腕だ。お前は合格だ」

エターナルの声。

しかし、その声はアクセルトライアルの後ろから聞こえた。

我に帰ったアクセルトライアルは後ろに振り向いた。

「貴様・・・どうやってかわした・・・・・・」

「簡単だ。ダミーメモリのマキシマムドライブで幻覚に攻撃させただけの話だ」

ダミーメモリとは偽物の記憶を内蔵するメモリ。

自らの容姿を変化させることもできるが、万物を変化させることも可能だ。

「次は外さん・・・・・・」

アクセルはトライアルを解除し、謎のアダプターをアクセルメモリに取り付けた。

〜ＡＣＣＥＬ！ＵＰＧＲＡＤＥ！〜

そしてそれをドライバーに装填しようとしたが。

「待て。オレはこれ以上闘うつもりはない」

エターナルは変身を解除し、戦闘の意思がないことを示した。

「どういう意味だ！」

だがアクセルは警戒を解かず、変身も解いていない。

「そのままの意味だ。オレはお前たちの知る大道克己じゃない」

いきなりの停戦に加え、自らをまるで別人のように言う。

「・・・詳しく説明しろ」

事情の飲み込めないアクセルはとりあえず変身を解いた。

そして、克己は説明を始めた。

「まず、オレは確かに大道克己だが、お前たちの言う大道克己ではない」

「そしてオレはＮＥＶＥＲでもない。普通の生きた人間だ」

「生き返ったわけでもない。オレは別次元の・・・」

そこで一度区切りをつけた。

「平行世界の大道克己だ」

平行世界。

関係や性格や状況は違うが、同じ人物の暮らす複数の世界。

それが平行世界だ。

「そんな事が信じられるか」

「じゃあオレが今お前の目の前にいる事実をどう説明できる？」

「だが・・・・・・」

「オレはこの世界のライダーを試しに来ただけだ。そしてお前は合格だ」

「試すだと？」

「ああ、今、この世界だけじゃない。全次元に危機が迫ってる」

「全次元・・・だと？」

次元の危機、それが示すのは少し昔の出来事と同じ結末。

ディケイドが防いだ世界の滅亡。

それがまたしても迫っているということだ。

「ああ。それを防ぐのにお前たちの力を借りたい訳だ」

「お前が世界を救いたいだと・・・？」

照井の知る「大道克己」とは、極悪非道の大悪人。

世界を救いたいなど、思いもしない発言だろう。

「あのな・・・・・・」

克己は少し間を開けて続けた。

「・・・この世界のオレがどんな人間だったかは知らないが」

「オレは別次元では正義の仮面ライダーなんだぜ？」

仮面ライダーエターナル。

この大道克己の変身するエターナルは別次元では正義のライダーらしい。

「加えて言うなら、オレの世界にはお前らはいない」

「なるほど・・・大体事情が掴めてきたな」

「そういうことだから。協力しろ」

「・・・いいだろう。だが左はいいのか」

「アイツは初めから合格だよ」

克己は少し爽快そうに応えた。

「なぜだ？」

照井の質問に、克己は静かに応えた。

「だってアイツは・・・この世界のオレを倒したんだろう？」

自分を倒せるくらい強ければ問題はない。

そういう意味なのだろう。

「なるほどな・・・」

「誤解を受けたままじゃ気分が悪い。お前からアイツに説明してくれ」

「分かった」

こうして2人の戦士は探偵事務所に戻った。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「おい・・・照井・・・」

翔太郎は克己を警戒している。

「興味深い・・・」

フィリップも翔太郎と共に事務所にいた。

「安心しろ、左、フィリップ」

照井は克己の一歩前に出て事情を説明した。

そして翔太郎は理解し、納得した。

だが、フィリップは克己にいくつか質問をした。

「なぜキミはこの世界に来れたんだい？」

エターナルメモリに次元移動の効果はない。

克己の所有する２６本のメモリにもそんな効果はない。

フィリップの疑問も当然と言える。

「パラレルワールドメモリ・・・・・・」

「何だって？」

「パラレルワールドというメモリを使う奴に飛ばされた」

「飛ばされた・・・ということは自分の意思でこの世界に来たわけでは」

「ない。単なる偶然だ」

「概ね把握した。では最後の質問だ」

フィリップは目をそらさずに聞いた。

「パラレルワールドメモリの所有者は、今どこにいる」

「・・・・・・」

克己は言葉を濁した。

それが何を意味するか、フィリップには分かっていた。

「どこにいる？」

「ライダーの居ない世界・・・・・・」

克己は続けてこう言った。

「ネクストと呼ばれる戦士が、平和を守る世界だ」

滅亡は始まったばかりだ。

そして、この出会いは序章でしかない。

これから続く、悪夢と滅亡の・・・・・・

～現れたE／平行世界のライダー～（後書き）

こんにちは。

書いてみましたが、いまだに虎鉄さんは出ません。

次回は虎鉄さん中心エピソードになります。

次回・ヒーローW／出会う戦士達。

～ヒーローW／出会う戦士達～（前書き）

今回はタイガーさん達主体で書きます。

ごゆるりとお楽しみください。

・・・・・・

まあ、始まったばかりなので。

～ヒーローW／出会う戦士達～

？ワイルドタイガーの次元？

そこは悪の蔓延る街・シュテルンビルト。

そこでは日夜犯罪者が横行し、それをヒーローが捕まえる。

それをテレビ中継し、犯人逮捕劇を放送する。

ヒーローＴＶ。

ヒーローは今も犯罪者を追いかけている。

そして場所はシュテルンビルト中心部。

現在、そこには2人のヒーローと1人のドーパントがいた。

ワイルドタイガー、そしてバーナビー・ブルックスＪｒ。

ヒーロー初のコンビヒーローとして活躍する、有名なヒーローだ。

そして対するは。

「クソっ！ここにもお前らみたいのが居たのか！」

パラレルワールドドーパント。

タイガーとバニーが追いかけているのは、パラレルワールドドーパントだった。

ネクストの大量殺害。

それがパラレルワールドドーパントの罪状だ。

正確には６人のネクストの殺害。

「オイッ！待ちやがれ、殺人犯！」

そう叫ぶワイルドタイガー。

タイガーは能力を発動していない。

ワイルドタイガーのネクスト能力・ハンドレッドパワー。

５分間、身体能力をすべて１００倍にするという能力だ。

だが、タイガーは長年に渡る激戦により、能力が減退している。

現在の能力発動時間は１分。

そのために、ワイルドタイガー・ワンミニットと呼ばれている。

「あなたはもう逃げ切れません！大人しく投降してください！」

そして今投降を呼びかけたのはバーナビー。

ネクスト能力はタイガーと同じく、ハンドレッドパワー。

まだ若いために、きっちりと5分間の間、身体能力が上昇する。
だが、ドーパントは逃げ続ける。
「クソっ・・・あと1人なんだ・・・あと1人・・・・・・」
誰にも聞こえない声でそう呟いた。
すると、ドーパントの目の前に誰かが現れた。
「お前は!?」
ドーパントは目の前の人間に掴み掛ろうとした。
だが。
グイッ!
「お前の能力、もらい受ける」
逆に首を鷲掴みにされてしまった。
ドーパントはジタバタと腕をはずそうともがいている。
「やめ・・ろっ・・・・・・お前・・は・・・・・・・」
ドーパントは途切れ途切れで言葉を発する。
すると謎の人間の手が青白く光り、何かがドーパントから流れ込ん

でいく。

「ぐっ・・・お前・・・・・・」

そして、やがて光りは収まった。

「礼を言う」

謎の人間は一瞬で姿を消した。

何が起きたのかは、ドーパントと謎の人間以外にはわからない。

「ハアっ・・・ハアッ・・・・・・・・・クソっ！」

ドーパントは自分の拳を地面に叩きつけた。

「おい、もう逃げられねえぞ」

「大人しくしてください」

いつの間にか、ヒーローはドーパントの背後まで来ていた。

謎の人間とのやり取りの間に追いついたのだ。

〜こんな所で捕まるくらいなら・・・・・〜

ドーパントはすぐそばの建物に手を押し当てた。

すると、その建物の壁が円状に歪んだ。

「あばよ！」

ドーパントはその歪みに飛び込んだ。

「あっ、待ちやがれ！」

躊躇うことなくタイガーも飛び込んだ。

「虎鉄さん！」

タイガーを追いかけて、バーナビーも歪みに飛び込んだ。

その歪みの先には・・・・・・

?.仮面ライダーWの次元？

そこは風都の中心部。

その場所には左翔太郎・照井竜。

そして変身したエターナルがいた。

「この辺りだな」

そう言うと、薄く黒いメモリを取り出した。

〜ＺＯＮＥ！〜

ゾーンメモリ。

それは空間の記憶を内蔵されたメモリだ。

そしてエターナルはゾーンメモリをエターナルエッジのマキシマムスロットに差し込んだ。

〜ＺＯＮＥ！ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ！〜

ゾーンメモリのマキシマムドライブ能力。

それは周りの空間の歪みや変動を感知できる。

克己が何故これを行なったかは数時間前の地震が原因だ。

〜もしかしたら次元地震かもしれない〜

そう思った克己は中心部まで移動して、調査を始めたのだ。

そして、それは的中した。

「！」

克己はゾーンメモリをエターナルエッジから引き抜くと、すぐに変身を解除した。

「おい、どうしたんだ？」
翔太郎が未だ半信半疑で聞いた。
「北に４ｋｍ、そこにパラレルの奴がいる」
エターナルはゾーンにより、調査を終えていたのだ。
すでに相手の所在地はつかんでいる。
「アクセル、お前が一番早いだろ。先に行ってくれないか」
「分かった」
照井は素早くドライバーを装着し、アクセルメモリを構えた。
〜ＡＣＣＥＬ！〜
「変・・・身っ！」
そしてアクセルに変身し、バイクモードという形態に形態変化させ、
急いで目的地に向かった。
「オレ達も行くぞ」
克己はアクセルの後を追いかけた。
「あっ、おい！置いてくなよ！」

その後を翔太郎が追いかけていった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

場所は風都の北方面。

そして、その周辺の公園の草影。

そこには傷ついたパラレルワールドドーパントが居た。

「ったく、あのバカヤローが・・・3人も一緒に次元移動できるかよ」

どうやら規定外の人数の次元移動を行なったために、ダメージを負ったようだ。

〜パラレルワールド！〜

ガイアメモリの音声が流れ、変身を解除した。

どうやら変身していたのは男のようだ。

「・・・まあとりあえずこの世界なら安心か・・・」

男は安堵していたようだ。

しかし。

「見つけましたよ」
男の背後から誰かが声をかけた。
その声の主はバーナビーだった。
「てっ、テメェ！なんで無事でいやがる！」
男は草影から飛び退いて、走って逃げた。
「これでも高いヒーロースーツなんでね」
そんな皮肉を言いつつ、バーナビーはすぐに男に追いついた。
「さあ、観念してください。もう完全に逃げ場はないですよ」
バーナビーが男に掴み掛ろうとした。
その刹那。
ギィンッ！
バーナビーの手が何かに弾かれた。
そしてバーナビーの目の前には、紅い装甲を纏った者がいた。
「お前がパラレルワールドドーパントか・・・・・・」
アクセルが目の前のバーナビーに向けて言った。

バーナビーの手を弾いたのはアクセルのエンジンブレードだった。
どうやらバーナビーをパラレルワールドドーパントと勘違いしているようだ。
「あなたは何者ですか？その男の共犯者ですか？」
バーナビーは突然現れた謎の紅い装甲の戦士に質問をした。
だが。
「俺に質問をするな」
アクセルはそれに応えることなく、エンジンブレードを構えた。
「・・・・・・どうやら愚問だったようですね」
バーナビーは話し合いを諦め、自身も構えを取った。
お互いにお互いを敵だと思い込んでいる。
だが、2人には油断も隙もない。
本物のパラレルワールドドーパントの男は2人の威圧感に喋り出せずにいた。
「さあ・・・・・・振り切るぜっ！」
アクセルは掛け声と共に走り出した。

「ハンドレッドパワー・・・・・・発動！」

バーナビーも能力発動を確認し、走り出した。

これがヒーローとライダーの、初めての出会いとなった。

～ヒーローW／出会う戦士達～（後書き）

次回はアクセルＶＳバーナビーのバトルを展開します。

次回・加速するＡ／スピードの闘い

～加速するＡ／スピードの闘い～（前書き）

さて・・・

３話目になります。

アクセルＶＳバーナビー・・・

正直自分でもワクワクする勝負です。

始まります。

～加速するＡ／スピードの闘い～

?.仮面ライダーＷの次元？

場所は風都北方面の公園。

そこには紅い装甲を身に纏った２人の戦士が居た。

仮面ライダーアクセルとバーナビーが激闘を繰り広げている。

「ハアッ！！」

アクセルが声を上げながら、エンジンブレードを振り下ろす。

「フンッ！」

だがバーナビーはそれを回し蹴りで弾き飛ばした。

そして、勢いそのままに回し蹴りをアクセルに浴びせる。

「クッ・・・・・・！」

アクセルは間一髪で腕をガードに回し、直撃を防いだ。

だが勢いは止まらず、そのまま後ろに吹き飛ばされる。

「チッ・・・」

舌打ちをしながらエンジンブレードを地面に突き立て、膝を付くアクセル。

立ち上がると同時に走り出し、もう一度ブレードを横に薙ぎ払った。

「遅いっ！」

バーナビーは軽々とブレードをかわし、アクセルの懐に鋭い蹴りを放った。

「がっ・・・・・・・」

アクセルは予想以上の衝撃に吹き飛ばされ、地面を転がる。

そして息を荒げながら、ゆっくりと立ち上がった。

〔強い・・・・・・そして、速い〕

アクセルは闘いながらもバーナビーの動きを測っていた。

そして、現時点ではバーナビーにスピードで劣る。

それを把握していた。

すると、アクセルはトライアルメモリを取り出した。

〔ＴＲＩＡＬ！〕

ガイアウィスパーからメモリ音声が流れ、それをドライバーに挿入

した。

「変・・・身っ！」

アクセルの紅い装甲が弾け、黄色に、そして青色に変化した。

全身の装甲を軽量化した形態、アクセルトライアルだ。

「色が変わった・・・？」

アクセルの変化に、バーナビーも多少動揺しているようだ。

そもそもバーナビーは仮面ライダーを知らない。

なので、目の前の敵を悪のヒーローと認識していた。

だが、戦闘中に形態が変化する奴など見たことがなかった。

「ここからが本番だ」

トライアルは走り出す構えを取りながら言った。

「・・・僕が勝ったら、あなたが何者か教えてもらいますよ」

バーナビーはトライアルに向き直り、言った。

一瞬、空気が止まる。

「全てを・・・振り切るぜっ！」

走り出したトライアルは、目にもとまらぬ速さでバーナビーに近づいた。

そして、バーナビーが気づいた時には、トライアルは目の前に来ていた。

「なっ！」

トライアルの突然の加速に、バーナビーは完全に反応が遅れた。

「ハアアアアっ！！」

マキシマムドライブはしていないが、全力で高速の蹴りを浴びせた。

バーナビーは防御する間も無く、直撃を受けて弾き飛ばされる。

「・・・・・・・・」

予想外のダメージに、声を上げることすらできない。

そして、膝で伏せる姿勢になり、立ち上がりきれずにいた。

「終わりだ。降参しろ」

アクセルは警戒こそ続けているが、追撃を加えようとはしない。

しかし。

「・・・驚きましたよ・・・・・・」

バーナビーはよろめきながら、静かに立ち上がった。
やはりダメージは隠しきれないようだ。
「まさか、そんな小さなメモリを取り替えるだけで、そこまでパワーアップするとは」
トライアルへの変身はスピードが飛躍的に上昇する。
その分、通常時よりパワーダウンするのだ。
つまり、パワーアップしたわけではない。
「ここからが本番ですよ！」
バーナビーは能力をフルに使い、一気に加速した。
そしてトライアルの眼前にまで迫り、渾身の力を込めた蹴りを浴びせかけた。
だがトライアルは警戒を解いてはいない。
バーナビーの加速は予想していたために、防御しきれるはずだった。
「ぐぁっ！！」
しかし、バーナビーの放った蹴りは直撃していた。
トライアルは、バーナビーの加速自体は予測できていた。

しかし、加速の幅までは予想しきれていなかった。
想像を越える速度で放たれた蹴りは、トライアルを完璧に捉えた。
「これが・・・・・・僕の実力です」
バーナビーはその場に膝をついた。
全力の反撃は、自身の身体にもダメージを与えていた。
「・・・上等だ・・・・・・」
トライアルはバーナビーの蹴りが直撃したにも関わらず、すぐさま立ち上がる。
だが、トライアルの青い装甲は、胸の部分がほぼ砕けていた。
やはり尋常ではない威力だったようだ。
トライアルでは闘えないと判断し、メモリをドライバーから引き抜いた。
変身が解け、通常時のアクセルに戻った。
そして、アクセルドライバーのグリップを握った。
〜ＡＣＣＥＬ！ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ！〜

アクセルメモリのマキシマムドライブを発動させた。
アクセルの右足が紅いエネルギーで包まれる。
「！」
バーナビーはアクセルの空気が変わった事を感じた。
そして自身もすぐに立ち上がり、右足に力を込めた。
〜ＧＯＯＤＬＵＣＫ・ＭＯＤＥ！〜
グッドラックモード、それはバーナビーとタイガーのスーツに搭載される機能だ。
タイガーは右腕が巨大化するのに対して、バーナビーは右足が巨大化する。
バーナビーの右足が何重もの装甲に包まれ、巨大化した。
「さあ・・・・・・振り切るぜっ！」
「これで・・・決めるっ！」
アクセルとバーナビーは同時に走り出し、翔んだ。
「アクセルグランツァー！！」

「アトミックブレイク！！」

２人の必殺技がぶつかり合い、大気が揺れる。

拮抗する大量のエネルギーが相殺され合う。

しかし。

「うおおおおっ！」

アクセルが残る限りの力を振り絞る。

バーナビーは体力を消耗しすぎている。

正面からぶつかり合えば、不利になるのは当然だった。

〜くっ・・・・・・押し負ける・・・〜

一瞬、僅かにバーナビーの力が緩んだ。

「振り・・・・・・抜くぜっ！」

そして、アクセルの蹴りがバーナビーの蹴りを弾き飛ばした。

そのままアクセルは蹴りを１回転させ、バーナビーに浴びせかける。

しかし、アクセルの蹴りがバーナビーに直撃する直前・・・・・・

〜ＧＯＯＤＬＵＣＫ・ＭＯＤＥ！〜

2人の頭上から、ヒーロースーツの機能音声が響いた。
グッドラックモードを使えるのはバーナビーの他には1人しかいない。
「ウオラァァァっ！！」
アクセルは頭上からの何者かの拳により、地面に叩きつけられた。
そして何者かはバーナビーを抱えて、着地した。
「今度はお前がお姫様だっこされたな、バニーちゃん」
白黒のヒーロースーツに緑のライン、バーナビーのパートナーヒーロー。
ワイルドタイガーその人だった。
「遅いですよ・・・・・・虎鉄さん」
バーナビーはそう言うと、気を失った。
タイガーはバーナビーを公園の隅に座らせ、アクセルに向き直した。
「オイ、そこの赤いの」
なんともアバウトな呼び方だが、アクセルの事だ。

肝心のアクセルは、限界を超えるダメージを受け、地面に伏せていた。

「一体どういう理由で、バニーと闘り合ってたんだ？」

タイガーはアクセルの首を掴み、近くの木に叩きつけた。

しかし、アクセルからの返答はない。

意識も朦朧としているが、ダメージと疲労から喋ることができない。

〜コイツらは・・・ドーパントじゃないのか・・・？〜

消えゆく意識の中で、そんな事を考えていた。

その刹那・・・

「そこまでだ」

タイガーが声に目を向けると、白い装甲を纏った戦士が立っていた。

「どうやら誤解が生まれてるようだな・・・」

白い装甲の戦士はゆっくりとタイガーに近づいていく。

「お前もこの赤いのの仲間か？」

タイガーはアクセルを押さえつけていた手を放した。

すると、アクセルの変身が強制解除された。

変身者のダメージによるものだろう。

「仲間・・・まあそんなところだ、タイガー」

白い装甲の戦士はタイガーの名前を知っていた。

「あん？何でオレの名前知ってんだ。どっかで会ったか？」

「いや、初対面だ」

白い装甲の戦士はドライバーからメモリを引き抜き、変身解除した。

その顔は大道克己だった。

「とにかく、一度話を聞いてくれ。バーナビーの事はオレが詫びる」

克己はタイガーの目の前に立ち、そう言った。

重なる関係。

そして、お互いはお互いを深く知ることになる。

～加速するＡ／スピードの闘い～（後書き）

どうもです。

「アトミックブレイク？なんじゃそりゃ」

と思った人がほとんどでしょう。

あれはオリジナルです。

原作には登場していません（＃＾．＾＃）

次回・Ｈの集結／克己の仲間

～Hの集結／克己の仲間～（前書き）

こんにちは。

少し久しぶりの投稿となります。

アクセルとバーナビーはほぼ相打ち。

タイガーとエターナルの接触。

始まります。

～Hの集結／克己の仲間～

？ワイルドタイガーの次元？

場所はシュテルンビルト中心部。

そこではタイガーとバーナビーを除いたヒーローが激戦を繰り広げていた。

空中ではスカイハイが。

海の上ではブルーローズが。

車上ではファイヤーエンブレムが。

街の中ではロックバイソンが。

ビルの上ではドラゴンキッドと折紙サイクロンが。

黒いヒーロースーツのバーナビーと闘っていた。

「このゲス野郎がぁぁっ！！」

街中で闘うロックバイソンが、思い切り相手に拳を入れる。

「今度はバーナビーのロボットなんか造りやがって・・・」

バイソンは相手が何者かを大体把握していた。
他のヒーロー達も、各々が大体を把握していた。

「Ｈ－０２」

黒いバーナビーは、闘いが始まる前にそう言った。
その昔、ワイルドタイガーに酷似したロボットが造られた。
その名はＨ－０１。
ロボながら凄まじい戦闘力を持ち、ヒーローを圧倒した。
一度はヒーロー全員が絶体絶命に陥ったほどの強さ。
結果として勝利したものの、その破壊力は計り知れない。
そして今回のＨ－０２。
名前からして、Ｈ－０１の後継機だろう。
しかし、Ｈ－０１の設計者とスポンサーは既に亡くなっている。
本来造られることは無い。
場所は変わり、あるビルの屋上。

その男は、以前ドーパントから何かを奪ったあの男だった。

「ヒーロー達、地獄を楽しみな」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

？仮面ライダーWの次元？

場所は風都、北方面の公園。

そこには気絶している照井とバーナビー、そして向かい合う克己と虎鉄。

そして公園の隅に蹲る、パラレルワールドメモリを握った男。

この5人が居た。

「それじゃ、説明してもらおうか」

タイガーがそれなりにドスの効いた声で言った。

「その前に、少し待ってくれ」

克己はタイガーを待たせ、公園の隅に向かった。
その視線の先には、パラレルワールドメモリを握った男がいる。
そして、克己は男の目の前まで来た。
「そのメモリを返してもらおうか」
低い声で男に言った。
「だ、誰が返すかよ！」
男はメモリを体に挿入しようとした。
「いいのか？」
克己はさっきより低い声で尋ねた。
「メモリの使用は闘いの始まる合図だ」
克己はそのまま続ける。
「お前も知ってるだろうが、パラレルに戦闘能力はない」
「もし、オレと闘うなら覚悟しておけ」
「正義の味方でも、つい手が狂って骨くらい折っちまうからな・・・」
およそ悪魔のような形相で、男に言い切った克己。

正義のライダーと言うものの、その性格は非情そのものだった。
男は恐る恐る、メモリを克己に渡した。
男の顔は恐怖で塗りつぶされていた。
「お前はどうしてこのメモリを盗んだ？」
「ネクストだよ・・・」
「何だと？」
「他人の能力を盗むネクストを殺すためだよ」
「どういうことだ」
「お前がネクストの次元に行ったせいで、パラレルの力がネクストに流れたんだよ！」
男は大声でそう言った。
「バカな・・・オレはネクストと接触はしてない」
「パラレルの力の大きさは半端じゃない、遠距離でも少しなら力を盗めたんだよ」
「それで、お前はメモリを盗んでネクストを殺していたわけか」
「悪いかよ、お前の尻拭いしてやったんだ」

「ふざけるな！」

克己は空気が震えるほどの大声で言った。

「何があっても、人殺しはだめなんだよ」

そう言うと、踵を返してタイガーの元に向かった。

タイガーは座り込んであぐらをかいていた。

「待たせたな」

「遅えんだよ」

タイガーは不満げに口を尖らせた。

克己もタイガーの目の前に座り込んだ。

「どこから説明しようか・・・・・・」

克己は少し考えて、話し始めた。

「まず、何故オレがタイガー達を知ってるかから話そう」

克己がタイガーに説明した内容はこうだ。

克己は次元崩壊の危機を知り、別次元のライダーに協力を求めに行こうとした。

平行世界を移動できるメモリは「パラレルワールド」しかない。

そのメモリを使い、まずたどり着いた次元が、タイガー達の次元だった。

一般人を装い、ネクストの調査を行い、タイガー達を知った。

そして一度自分の次元に戻り、メモリをメンテナンスに出した。

そこを男に侵入され、メモリを奪われた。

その男のせいで、克己はダブルの世界に飛ばされた。

こういう経緯だった。

「なるほどなぁ・・・まあ事情は分かったが、バニーが何で闘ってたかはどうなんだ？」

「それは本人達が起きてから、聞くしかないな」

2人が会話を続けている途中。

「おいっ！置いてくなって言っただろうが！」

翔太郎が公園にたどり着いた。

「遅かったな」

「遅かったな、じゃねえよ・・・・・・ん？」

そこで翔太郎はやっとタイガーの存在の気づいた。

「ドーパント！？」

翔太郎は腰にドライバーを当てようとした。

「待て、この人はドーパントじゃない」

克己はドライバーを持つ翔太郎の手を止めた。

そして、翔太郎に数分かけて説明した。

「ああ、そうだったのか・・・」

翔太郎は克己の説明で大方納得したようだ。

「どうも、この街を守るヒーロー、仮面ライダーWこと左翔太郎です」

翔太郎はタイガーに向けて挨拶をした。

すると、タイガーもマスクを外した。

「いやどうもご丁寧に、シュテルンビルトのヒーロー、ワイルドタイガーこと鏑木・T・虎鉄です」

虎鉄も挨拶を返した。

3人は良い感じの出会いを果たした。

その後の会話を少しだけ覗いてみよう。

翔「へえ～虎鉄さん、娘さんがいるんですか」

虎「ああ、まだ全然ガキなんだけどな」

克「その娘もネクストなのか」

虎「まだ完全にじゃないけど、まあネクストだな」

翔「じゃあ娘さんもいつかヒーローに？」

虎「いや、あいつには普通の女の子の幸せを味わって欲しいんだ」

克「良いオヤジを持ったな、その娘」

とまあそんな話である。

そして。

「とりあえず、2人を連れて事務所に戻ろうぜ」

翔太郎が提案をした。

「ああ、2人共ケガ人だしな」
克己はそう言うと、照井を肩に担いだ。
「事務所？そこに行くのか？」
虎鉄は疑問を抱きながらも、バーナビーを担いだ。
「ああ、別に歩いていくわけじゃねえから、担がなくてもいいぜ」
そう言うと、翔太郎は少し大型の携帯電話を取り出した。
そのケータイのボタンを何回か押した。
数分後・・・・・・
「なんだ！？このデカイ車は！」
虎鉄は見たこともない装甲車に驚いた。
「コイツはリボルギャリー、俺の相棒のマシンだ」
3人はリボルギャリーに乗り込んだ。
「よし、じゃあ事務所に向かうぜ」
別次元の戦士達は和解し、お互いに理解した。

～～～～～～～～～～～～

?.仮面ライダーエターナルの次元？

場所は克己のアジト。

ライダーとして活動している克己にも、アジトくらいある。

そこには４人の人間が居た。

「克己ってアタシ達のメモリ持ったままだよね？」

艶やかな声の女性が言った。

「ああ、おかげで俺たちは変身不能だ」

その男性は銃の手入れをしながら言った。

「もう！どこに行ったのよ克己ちゃん！」

女性・・・ではなくオカマ言葉の男性が言った。

「どうせすぐ帰ってくんだろ、おとなしく待ってるしかねえ」

頭にバンダナを巻いた男が言った。

彼らの近くのテーブルには、ロストドライバーが４つ並んでいた。

克己の本当の仲間である。

～Hの集結／克己の仲間～（後書き）

・・・

どうも、書いてから気づいたのですが。

読みにくいですよね、これ。

後々修正するかもしれませんがご容赦ください。

次回・本当のP／4人の仮面ライダー

～本当のP／4人の仮面ライダー～（前書き）

今回のタイトルのPは・・・

・パラレルワールド
・パートナー
のPです。

1月は更新が滞りそうなので・・・

今年中にたくさん更新しようかと。

始まります。

～本当のＰ／４人の仮面ライダー～

?.仮面ライダーＷの次元？

場所は風都から４０ｋｍ。

普通の街並みが並ぶ、道路。

「翔太郎さん、元気にしてるかな・・・・・・」

そう言う男のズボンポケットからは、派手な色の布地が見えた。

～～～～～～～～～～～～

場所は移り、風都の鳴海探偵事務所。

更に隠し扉を通った秘密基地内。

そこでは１人の少女が喚いていた。

「ちょっとぉ～！コレどういうことなのよっ！？」

彼女の名は鳴海亜樹子。

この鳴海探偵事務所の所長である。

そして、彼女は目の前の光景について翔太郎に問いただしていた。

「落ち着けっ！亜樹子、コレには深い事情が・・・」

「どんな理由があれば大道克己が甦るのよ！？」

亜樹子の目の前には虎鉄・バーナビー・照井・克己・翔太郎の５人がいる。

フィリップの姿は確認できない。

「いや、この克己は別次元の克己で・・・」

「意味わかんない！ちゃんと説明してよ！」

依然として、パニック状態が続いている。

そんな状況に、隠し扉が開いた。

「やあ、翔太郎」

フィリップだ。

「おや？また知らない人が来ているね」

扉から入り、螺旋階段を登り、みんなの元の着いた。

「どこ行ってたんだ、フィリップ」

「お客様を迎えに行ってたんだ」

「お客様？」

翔太郎はネクタイを直しながら言った。

「入ってくれ」

フィリップがそう言うと、扉から男が入って来た。

軽い足取りで階段を上り、みんなの前に来た。

「どうも、お久しぶりです」

全員の前でおじぎをした。

彼の名は火野英司。

仮面ライダーオーズだ。

「オーズ・・・どうしてここに？」

翔太郎は締め直したネクタイを緩めた。

「いえ、日本に帰ってきたので挨拶だけでもって」

「そこをボクが見つけて、連れてきた訳さ」

英司は世界中を飛び回っている。

以前のパートナー、アンクのコアメダルを修復するために情報を集めるために。

現在アンクのコアメダルは英司が持っているが、メダルは真っ二つになっている。

「コイツも仮面ライダーか？」

克己が英司の目の前に立った。

「どうも仮面ライダーオーズこと、火野英司です」

克己の冷たい視線を他所に、明るい表情で挨拶を交わす。

お互いに睨み合う形になっている。

「仮面ライダーエターナルこと、大道克己だ」

克己は無表情だが、英司に手を差し出した。

英司もそれを握り返し、一応は握手の形になった。

その間に、フィリップは錯乱する亜樹子を連れ出し、事情を説明していた。

「おーい、照井。起きろー」

翔太郎が呼びかけるが、起きる気配はない。

すろと正太郎は小声で。

〜キャー、助けてー、ドーパントよー〜

と言った。

「ドーパントはどこだ！？」

カッ、と目を見開きすぐさま起きた照井。

「目が覚めたみたいだな」

「左？俺は確かパラレルワールドドーパントと・・・」

まだバーナビーをパラレルワールドドーパントと勘違いしている。

「僕はドーパントじゃありませんよ」

少し先に目を覚ましていたバーナビーが照井に言った。

ヒーローマスクは外している。

「じゃあお前は何者だ」

「僕に質問しないでください」

〜俺に質問をするな〜

さっき言われたこの言葉を相当根に持っていたようだ。

「貴様・・・」

自分の決めセリフを真似された照井は、アクセルメモリを構えた。

「落ち着け、お前ら」

克己は照井のアクセルメモリを取り上げた。

「さっき話しただろう、この人達がネクストって正義の味方だよ」

照井を諭すように言った。

「僕はシュテルンビルトを守るヒーロー、バーナビー・ブルックスＪｒです」

バーナビーは照井に向けて挨拶をした。

すると、大体の事情をつかんだ照井も。

「仮面ライダーアクセルこと、照井竜だ。さっきの非礼を詫びる、済まなかった」

そしてお互いに握手を交わした。

もうお互いを敵と勘違いする者はいなくなった。

すると、克己が。

「オレは一度自分の次元に戻る、仲間を呼ぶためにな」

そう言うとエターナルに変身し、パラレルワールドメモリを使った。
事務所の壁に、円形の歪みが生じる。

「タイガー！バーナビー！どこにいるの！？」

誰も喋ってはいない。
それはタイガーとバーナビーのヒーロースーツから聞こえた。
次元の歪みの影響で通信が繋がったのだろう。

「こちらワイルドタイガー、何かあったのか？」

「やっと繋がった！こっちは壊滅寸前なのよ！早く来て頂戴！」

「壊滅？状況は？」

「バーナビーの偽物が複数、ヒーローはほぼ押されてる」

「バーナビーの偽物？・・・まさかあのロボットか！？」

「多分、あなたの偽物と同じタイプよ」

それを訊いたタイガーは通信を終了した。

「おい、克己」

タイガーは険しい顔で克己に言う。

「俺達を元の次元に戻せ、仲間が危ないんだ」

「だが、他のヒーローが壊滅状態なのにお前ら2人じゃ勝機なんて」

「関係ねえんだよ！！」

事務所内に響きわたるタイガーの怒声。

「仲間が危なかったら、どんな時でも助けに行くのが、ヒーローだろうが」

その場の空気が静かに止まる。

そして。

「俺達も行くぜ」

翔太郎が言った。

「俺も行く」

照井が言った。

「オレも行きますよ」

英司が言った。

「またハーフボイルドかな？」

フィリップが翔太郎に言った。

「うるせぇ。仲間の仲間は、仲間なんだよ」

帽子を深くかぶりながら、翔太郎は言った。

「出来るだろ？克己」

「・・・４人か・・・マキシマムなら行ける」

そう言うと、エターナルエッジにパラレルのメモリを挿入した。

〜パラレルワールド！ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ！〜

パラレルワールドの力が最大まで引き出される。

円形の歪みが２倍ほどの大きさになった。

「悪いな、みんな」

タイガーが頭を下げながら言うが。

「ヒーローはピンチの仲間を助けるんだろ？」

克己が言った。

「後でオレもそっちに行く。そんなに歪みは持たない、早く行け」

「サンキュー、克己！」

タイガーと翔太郎が飛び込む。

「お前が来る前にケリをつけておく」

照井とバーナビーが飛び込む。

「ありがとうございます、克己さん」

英司とフィリップも歪みに飛び込んだ。

仮面ライダーW。

仮面ライダーオーズ。

仮面ライダーアクセル。

バーナビー。

ワイルドタイガー。

6人のヒーローはネクストの次元に向かった。

「さて・・・オレが仲間を連れていくのが先か・・・あいつらが片付けるのが先か・・・」

エターナルは少し時間をおいてから、次元の歪みに飛び込んだ。

向かう先は、エターナルの次元である。

～本当のＰ／４人の仮面ライダー～（後書き）

序盤なのに決戦みたいなメンバーですね・・・

でも次回は未確認のライダーが出ると思います。

〔予定〕

次回・燃え盛るＨ／本物のヒーロー

～燃え盛るＨ／本当のヒーロー～（前書き）

どうも。

今回はＨ－０２ＶＳ仮面ライダーみたいな構図になります。

勿論バーナビーとタイガーも活躍しますよ（＾ω＾）

あと・・・燃え盛るＨのＨはヒートではなく・・・

ハートです。

始まります。

～燃え盛るH／本当のヒーロー～

?.仮面ライダーエターナルの次元？

場所は克己のアジト。

アジトの壁が円形に歪み、そこから白い装甲が見えた。

「お前ら、待たせたな」

歪みから現れたのは、エターナルだった。

エターナルメモリをドライバーから引き抜き、変身を解除する克己。

「もう！克己ちゃん、遅いわよ！」

オカマ言葉の男が克己に抱きつこうとした。

「悪いな、京水」

克己はそれをヒョイっ、とかわしてそのまま歩を進めた。

そしてアジトの中央に立ち、その場の人間に呼びかけを始めた。

「よく聞けお前ら、これからネクストの次元に向かう」

「なぜだ？」

狙撃銃のメンテナンスをしている男が訊いた。
「協力を求めた仲間が危ない、賢」
男はメンテナンスを中断し、克己に手を差し出した。
「俺のメモリを渡してもらおうか」
仲間に言うにしてはキツめの言葉だが。
「ああ、頼りにしてるぜ」
克己は気にせず、賢と呼ばれた男に青いガイアメモリを渡した。
「オレのメモリもだ！」
頭にバンダナを巻いた男も手をだした。
「剛三、今度はオレ達に攻撃当てるなよ」
そう言うと、克己は銀色のメモリを剛三と呼ばれた男に渡した。
「面倒くさいから残っててもいい？」
艶やかな声の女性が言った。
「じゃあお前は留守番だな、レイカ」
「冗談よ。アタシのメモリ、早く渡して」

克己は赤いメモリをレイカと呼ばれた女性に投げ渡した。
レイカはそれを片手でキャッチした。
「克己ちゃん！私のメモリは！？」
京水と呼ばれたオカマが克己の肩を揺さぶった。
「落ち着け、ホラ、これだろ」
克己は黄色いメモリを京水に渡した。
「全員、メモリは使える状態だろうな？」
克己が全員にそう訊いた。
賢は青いメモリを前にかざし、ボタンを押した。
〜ＴＲＩＧＧＥＲ！〜
ガイアウィスパーからメモリ音声が響く。
剛三も銀色のメモリを前にかざし、ボタンを押した。
〜ＭＥＴＡＬ！〜
レイカも赤いメモリを前にかざし、ボタンを押した。
〜ＨＥＡＴ！〜

京水も黄色いメモリを前にかざし、ボタンを押す。

〜ＬＵＮＡ！〜

「問題ないわよ！」

最後の京水が克己に伝えた。

「ならすぐに行くぞ」

克己はロストドライバーを腰に当てた。

そしてエターナルメモリをドライバーに挿入した。

〜ＥＴＥＲＮＡＬ！〜

メモリ名と軽快な音声が再生され、白い装甲に包まれる。

〜パラレルワールド！ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ！〜

そしてパラレルのマキシマムを発動させた。

壁に数人が通れるサイズの円形の歪みが現れる。

「お前ら、久しぶりの仕事だ、存分に喰らえ」

とても正義のライダーとは思えないセリフを言い、歪みに飛び込んだ。

「ゲーム・・・スタート」

「全員オレがブッ潰してやるぜ！」

「早めに終わらせたいわね」

「イケメンがいたら最高！」

克己の後に続き、４人の仲間も歪みに飛び込んだ。

エターナルの次元のライダーチーム。

その名前は、ＮＥＶＥＲ。

「二度と誰も死なさない」という意味らしい。

克己の考案である。

～～～～～～～～～～～～

？ワイルドタイガーの次元？

場所はシュテルンビルトのビルの壁。

壁がグニャリ、と歪み、そこからワイルドタイガーと翔太郎が現れる。

「・・・ようし！戻れたぜっ！」

先に出てきたのはタイガーだった。

「ここが・・・ネクストの世界・・・・・・」

翔太郎はネオンの光が眩しい街並みに、見入っていた。

そこへ、何かが飛んできた。

「「危ねぇっっ！！」」

タイガーと翔太郎はギリギリでそれをかわした。

それは濃い緑の物体だった。

「って・・・お前、バイソンじゃねえか！？」

飛んできた物体とは、ネクストヒーローのロックバイソンだった。

その姿は見る影もなく、ヒーローマスクと右手足の装甲はほぼ全壊だった。

「ぐはっ・・・おえぅ・・・・・・」

声にならない嗚咽をもらし、すでに瀕死の状態だった。

「おいっ！バイソン、大丈夫か！」

タイガーはバイソンを抱きかかえ、意識を確認した。

「あん・・・？テメェ・・・タイガーか・・・？」
意識はあるが、視覚ははっきりしてないようだ。
「そうだよ、ワイルドタイガーただ今参上、ってな」
「来るのが遅ぇよ・・・・・・」
バイソンの意識はそこで途絶え、気を失った。
タイガーはバイソンをビルの壁にもたれかけさせた。
「悪いな・・・」
そして、バイソンが飛んできた方向を強く見つめた。
そこには黒いバーナビー、Ｈ－０２がいた。
「目標、ロックバイソンの起動停止を確認」
機械的な音声で、それは言った。
「お前か、バーナビーの偽物野郎は・・・・・・」
タイガーは地面を強く踏みしめた。
「虎鉄さん、俺もやります」
翔太郎はロストドライバーを腰に装着した。

そして、漆黒のガイアメモリを取り出した。

〔ＪＯＫＥＲ！〕

切り札の記憶を封じ込めたメモリだ。

「・・・変身っ」

ジョーカーメモリをドライバーに挿入する。

すると翔太郎の全身が漆黒の装甲で包まれ、短い変身音が響いた。

翔太郎１人で変身するこのライダーを、仮面ライダージョーカーと呼ぶ。

そして、翔太郎も構えをとった。

タイガーはハンドレッドパワーを発動させた。

ヒーロースーツの黄緑のラインが光り輝く。

「害意アリと判断、強制的に排除する」

Ｈ－０２は関節の駆動と共に、ギシギシと機械音を立てる。

「さあ・・・お前の罪を数えろっ！」

「ワイルドに・・・吠えるぜっ！」

～～～～～～～～～～

場所は移り、ビルの屋上。

そこではドラゴンキッドと折紙サイクロンが、Ｈ－０２と闘っていた。

「ハア・・・ハア・・・・・・」

キッドは電撃を操り、Ｈ－０２を攻撃するものの、一向に効いていない。

「・・・コイツ・・・頑丈でござるな・・・」

先程から巨大な手裏剣で攻撃を続けている折紙は、疲れはててていた。

「排除」

Ｈ－０２は加速し、一瞬でキッドの目の前に現れた。

「えっ・・・」

すでに疲労がたまっていたキッドは、回避も防御も間に合わない。
Ｈ－０２の鋭い蹴りが、キッドを捉える寸前。
「ハアッ！」
誰かの蹴りが、Ｈ－０２の蹴りを弾いた。
キッドの目の前の床が、円形に歪んでいる。
「大丈夫ですか？」
その歪みから現れたのはバーナビーだった。
「バーナビーさん！？」
キッドは驚きのあまり数ｍ後ろにたじろいだ。
「ここがシュテルンビルトか・・・」
歪みから照井も現れた。
「照井さん、街を眺めてる場合じゃないですよ」
「ああ」
照井とバーナビーは目の前のＨ－０２を見つめた。
照井はアクセルドライバーを腰に装着した。

そしてアクセルメモリを取り出し、ドライバーに挿入する。

「変・・・身っ！」

〜ＡＣＣＥＬ！〜

バイクのエンジン音のような音楽と共に、全身が紅い装甲で包まれる。

ここに仮面ライダーアクセルがシュテルンビルトに参戦した。

「ここは僕が引き受けます、照井さんは他のヒーローの所に」

バーナビーはアクセルの一歩前に立ち、構えをとった。

「1人で大丈夫か？」

「僕に質問、しないでください」

それを聞いたアクセルは少しだけ微笑みながら。

「任せたぞ、バーナビー」

と言った。

アクセルはバイクモードに変形し、ビルの壁を垂直に降りていった。

「バーナビーさん・・・今の人は・・・？」

折紙がバーナビーに訊いた。

それに対し、バーナビーは。

「頼りになる、強い仲間です」

迷うことなく、そう応えた。

「お2人は下がっていてください、コイツは僕が」

バーナビーは全身に力を込め、拳を強く握る。

「ハンドレッドパワー・・・発動!!」

～～～～～～～～～～

場所は移り街中のマンホール。

マンホールの蓋が開き、そこから2人の人間が現れた。

「なんでこんな所から・・・・・・」

1人目は英司。

「キミは冬の時もマンホールからリオに行っていたからね・・・」

2人目はフィリップだ。
「ここがネクストの世界ですか・・・」
「興味深い・・・」
2人は街に見入っていた。
というか全員が街に興味を示しすぎである。
すると、空中から何かが降ってくる。
銀色の鉄の塊のようなものだ。
「フィリップさん、アレこっちに落ちてきませんか？」
「そうだね、命中確率は97％だよ」
そして、それは英司達の居る場所に落ちてきた。
その物体の横1mの位置に、ギリギリでかわした2人が居た。
「フィリップさん！言うのが遅いですよ！」
地面に伏せる形でかわした英司が言った。
「それよりも・・・これは・・・」
フィリップは落ちてきた物体を確認した。

「うぐ・・・ああ・・・」

それはキングオブヒーローのスカイハイだった。

「大丈夫ですか！？」

英司はスカイハイに駆け寄った。

スカイハイもスーツはボロボロで、瀕死に近かった。

ドスンっ！！

そして大きな衝撃と共に、空中から黒いヒーロースーツが現れた。

「なるほど・・・アレが最強のロボット、みたいだね」

フィリップは懐から何かを取り出そうとしたが。

「俺がいきます！」

英司が先にオーズドライバーを腰に装着した。

そして懐から3枚の赤・黄・緑のコアメダルを取り出し、ドライバーにセットした。

右手でオースキャナーを掴み、ドライバーにスライドさせる。

「変身っ！」

〜タカ！トラ！バッタ！〜

オースキャナーから3枚のメダル名が鳴り響く。

〜タットッバ・タトバ・タットッバ！〜

英司の身体が3色の光に包まれ、黒がベースの装甲を纏った。

これが仮面ライダーオーズ・タトバコンボだ。

「よしっ、行くぞ！」

勢いのままに走り出そうとしたが。

「待ちたまえ」

そう言うとフィリップは、ロストドライバーを取り出し、腰に装着した。

「え？フィリップさん？」

フィリップの突然のストップに、オーズは動きを止めた。

「一応は先輩、だからね」

そして懐から緑のガイアメモリを取り出し、ボタンを押した。

〜ＣＹＣＬＯＮＥ！〜

メモリ音声がガイアウィスパーから再生される。

「変身」

そしてそれをドライバーに挿入した。

〜ＣＹＣＬＯＮＥ！〜

風を連想させる軽快な音楽が流れ、翠の装甲がフィリップを包み込む。

「ここはボクが引き受けよう」

軽くその場でステップを踏み、自分の状態を確認した。

「うん、初変身にしては上出来かな」

仮面ライダーサイクロン。

フィリップの単独変身のライダーである。

「キミは他のヒーローの下へ行くんだ」

そう言うと、いつもの構えを取った。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

～燃え盛るH／本当のヒーロー～（後書き）

どうも・・・

私用でいそいでたので雑になってしまいました・・・

すぐに加筆してしまうかもしれません。

本当にすいません。

あと、仮面ライダーサイクロンはオリジナルです。

でも、ありえる話ですよね（＾ω＾）

次回・２人のW／ハーフボイルド

～二人のW／ハーフボイルド～（前書き）

久しぶりの投稿となります。

少し時間が取れました。

ジョーカー＆タイガーＶＳＨ－０２。

始まります。

～二人のW／ハーフボイルド～

？ワイルドタイガーの次元？

場所はシュテルンビルト中心部。

そこにはＨ－０２と向かい合う、仮面ライダージョーカーとワイルドタイガーが居た。

「速攻で片付けるぜ！！」

「はい！！」

そして２人は全力で疾走しＨ－０２に近づく。

ワイルドタイガーの能力は１分しか持たない。

早々に決着を付けなければ、敗北するのは目に見えていた。

「オラァッ！」

「ハアッ！」

タイガーは拳をジョーカーは蹴りを、Ｈ－０２に全力で叩き込んだ。

「・・・・・・」

しかし、Ｈ－０２は微動だにしない。

「っ・・・・・・コイツ・・・・」

「効いてねぇ・・・・」

タイガーの残り時間は４５秒。

「オレが動きを止める！お前はそこを全力でブチ抜けっ！」

タイガーはそう言うと、右手からレーザーワイヤーを取り出した。

そしてＨ－０２に向けて発射して身動きを封じ、自身も距離を少し置いた。

その間にジョーカーは少し距離を取り、マキシマムスロットにジョーカーメモリを差し込む。

〜ＪＯＫＥＲ！ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ！〜

「行くぜ・・・！」

ジョーカーは離れた場所から疾走し、空高く翔んだ。

そしてＨ－０２に向けて、空中で蹴りの構えを取る。

「ライダー・・・・キック！」

そのまま降下し、Ｈ－０２に全開の威力のライダーキックを浴びせた。

「ウオオオオッ！」

ジョーカーは蹴りを叩き込み、Ｈ－０２を踏み台に地面に着地した。

「これなら・・・・・・」

ジョーカーはメモリをドライバーに戻し、Ｈ－０２を見た。

しかしその視線の先には、Ｈ－０２はいなかった。

「後ろだっ！」

タイガーの咆哮によりジョーカーは後ろに振り向いた。

ゴッ・・・・・・

鈍い衝撃音が響き、ジョーカーのライダーマスクが砕ける。

ほんの一瞬、時間がスローになった気がした。

Ｈ－０２の強固な装甲の蹴りが、ジョーカーの顔面を捉えたのだった。

「翔太郎！！」

タイガーはＨ－０２に向かって走り出した。

〜ＧＯＯＤＬＵＣＫ・ＭＯＤＥ！〜

タイガーはグッドラックモードを発動し、その右手が何重もの装甲に包まれる。

「オラァッ！」

その巨大化した右拳を、Ｈ－０２に叩き込もうとしたが。

「・・・回避」

Ｈ－０２はヒラリ、と飛んでかわして距離を取った。

そのボディには、ライダーキックの跡どころかカスリ傷すらない。

タイガーはそんな事は気にも留めず、翔太郎に駆け寄った。

「おいっ！翔太郎、大丈夫か！？」

返事はない。

そしてタイガーの残り時間は１７秒。

〜クソッ・・・・・・どうすりゃいいんだ・・・〜

打つ手なし、どう見ても敗北を待つしかない。

しかし。

「・・・きら・・・な・・・・・・・」

翔太郎の口が、微かに動いた。

「翔太郎！」

意識を確認するために、何度も呼びかけるタイガー。

「あきら・・・めんな・・・・・・」

そして翔太郎の変身が完全に解けた。

「虎鉄さん・・・ヒーローは諦めねぇんだよ・・・」

残り９秒。

するとタイガーは全力で駆け出した。

〜ヒーローは諦めねぇんだよ〜

頭の中で、翔太郎の言葉が繰り返される。

タイガーの視線は、Ｈ－０２しか見ていない。

「オレは、ヒーローなんだよ！！」

誰に向かって言った訳ではなく、自分に向けて確認した。

タイガーはもう一度レーザーワイヤーを使い、Ｈ－０２の動きを封じた。

そしてさっきのジョーカーのように、空中に翔んだ。

「翔太郎、お前の力、借りるぜ」

そう言うと、タイガーはスーツの上からロストドライバーを装着した。

そして、ドライバーのマキシマムスロットにジョーカーメモリを差し込んだ。

〜ＪＯＫＥＲ！ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ！〜

〜ＧＯＯＤＬＵＣＫ・ＭＯＤＥ！〜

タイガーはグッドラックモードとマキシマムドライブを同時使用した。

先程翔太郎の変身が解けた時に、ドライバーとメモリを預かったのだ。

残り４秒。

「ハンドレッド・・・・・・ライダーパンチ！！！」

ハンドレッドパワーにより、通常の１００倍の威力のライダーパンチが放たれる。

普通の人間の翔太郎が放っても、その威力は数トンに及ぶ。

しかしタイガーのそれは１００倍の威力、即ち数百トンの威力を持つライダーパンチ。

それはＨ－０２に直撃した。

「ウオオオオオオォォッ！！」

残り２秒。

全力で、力の限り拳を振り抜く。

マキシマムドライブにハンドレッドパワー。

強力な２つエネルギーの渦に巻き込まれ、Ｈ－０２は大爆発した。

タイガーが確認したＨ－０２は、文字通りバラバラの状態だった。

黒い装甲は溶け、内部の機械部品も丸見えで、完全に沈黙した。

「よっ・・・しゃぁっ！！」

タイムオーバー。

タイガーのハンドレッドパワーが切れた。

今から3時間は能力を発動できない。

タイガーはヒーローマスクを外し、翔太郎の下に向かった。

「おい、翔太郎」

「・・・勝ってきました？・・・・」

「おう、オレ達2人の力でな」

「そりゃ、なによりっス・・・」

翔太郎は外傷こそないが頭に蹴りを受けたために、軽い脳しんとう状態だ。

対してタイガーも慣れないマキシマムドライブにより、体はボロボロだ。

ギリギリの勝利、と言える。

「よしっ、じゃあそのへんで休むぞ」

「えっ・・・でも他のヒーローは・・・？」

「バーカ、お前の仲間がいってんだから、心配ねえだろ？」

「・・・そうっスね」

そんな会話を終え、タイガーは翔太郎を担いで病院に向かった。

すでに翔太郎も自分も、心身共にボロボロだった。

〔５９、３１秒か・・・また少し減退してるじゃねぇかよ・・・〕

タイガーはヒーローマスクの画面に映し出されている秒数を、見つめていた。

～二人のW／ハーフボイルド～（後書き）

ふう・・・・・・

ひさしぶりで何か感覚がつかみずらかったです。

次回はバーナビーＶＳＨ－０２！

同型別種のスーツの戦い・・・

次回・憤怒のＢ／本物のバニー

～憤怒のＢ／本物のバニー～（前書き）

どうもです。

又々久々の投稿となります。

時間が取れずに滞ってしまってすいません。

バーナビーＶＳＨ－０２。

始まります。

～憤怒のＢ／本物のバニー～

？ワイルドタイガーの次元？

場所はシュテルンビルト中心部の高層ビルの屋上。
そこには傷ついた折紙サイクロンとドラゴンキッド。
その２人を庇うように立っているバーナビー。
そしてその３人に向かい合うＨ－０２の、３人と１体がいた。
「１つだけ聞く」
強風が吹き荒ぶ中、沈黙を破ったのはバーナビーだった。
「お前は誰に造られて、どこから来た？」
その言葉は言うまでもなく、Ｈ－０２に向けて放たれた言葉。
気のせいか、バーナビーは憤りを感じているようだった。
対してＨ－０２は、感情を持たぬ静かな機械音声で言った。
「オリジナル素体、バーナビー・ブルックスＪｒと断定」

それはバーナビーの応答ではなく、自己分析結果を述べただけだった。

むしろＨ－０２はバーナビーの質問すら眼中にないようだ。

「・・・もう一度だけ言う、お前は誰に造られ、どこから来た？」

先程よりも低い声で、質問を繰り返した。

「対象設定を撃破から確保に変更、実行する」

同様に、応答にならない分析を繰り返すＨ－０２。

もはや両者の間に会話の余地は、ない。

「もういい・・・お前を破壊する」

バーナビーは会話を諦め、臨戦態勢に構えた。

「害意アリと判断、実力行使に変更」

Ｈ－０２も戦闘に備え、構えを取った。

今まさに同型のヒーロースーツによる闘いが始まろうとしていた。

しかし同じなのはフォルムだけで、スペックにおいてはＨ－０２が遥かに凌ぐ。

バーナビーはそれを戦闘前から理解していた。

タイガーと共闘してやっと1体を撃破した「Ｈ－０１」の後継機。
１人での勝算は、ほぼ零に等しい。
しかし、バーナビーには目の前の敵を許せない理由があった。
「行くぞっ！」
先に動いたのはバーナビーだった。
咆哮と共にすでにハンドレッドパワーを発動させている。
残り時間５分。
〜パワーでは勝てない・・・だがスピードなら！〜
文字通り目にも止まらぬ速さでＨ－０２に接近して行く。
「ハッ！」
スピードに勢いを乗せ、全力の蹴りを敵の顔面に叩き込んだ。
だがすぐさま体制を戻し、後ろに引いた。
〜どのくらいのダメージか・・・〜
バーナビーは自分の全力の攻撃が、Ｈ－０２をどれだけ傷つけるかを見定めていた。
今の攻撃はそのための牽制だった。

そして蹴りを叩き込んだ相手の顔面を見た。

「・・・・・・」

視線を向けた顔面の装甲には、傷一つない。

ほんの少し塗装が剥げたくらいである。

〜やはりその程度のダメージか〜

バーナビーは大方どの程度のダメージがあるか予測はできていた。

Ｈ－０１との闘いですら通常攻撃は全く通じなかった。

それ故に致命的なダメージは与えられないと予想していたのだ。

〜持久戦になると勝ち目はない・・・〜

残り時間４分２０秒。

何もしなくても、バーナビーの敗北の足音は近づいてくる。

〜・・・そうだ！〜

バーナビーは敗北を連想する前に、勝利の方程式を組み立てた。

しかし、そうそう上手くは運ばない。

「・・・・・・！」

Ｈ－０２は何かに勘づき、猛スピードでバーナビーに接近してきた。
そしてそのまま回転を加えた大振りの蹴りを繰り出す。
「くっ・・・・！」
バーナビーはアクセルとの戦いから学び、戦闘中に油断することは無くなった。
そのためにギリギリでガードが間に合い、蹴りを防ぐことが出来た。
しかしＨ－０２の猛攻は止まない。
「・・・・・・」
無言のままに、尋常ではない威力の蹴りを次々に繰り出してくる。
そしてバーナビーは徐々に追い詰められていく。
直撃は防いでいるものの、身体へのダメージは決して零ではない。
残り時間３分。
〜もう少し・・・もう少しだ・・・〜
徐々にビルの端に追い詰められているにも関わらず、バーナビーは己の秘策を実行しようとしていた。
未だに猛攻の嵐は止まない。

そして遂に後がなくなってしまった。

バーナビーの背後には、深い黒に染まった空しか見えない。

〜ここだ！〜

バーナビーは防御から一転し、素早くＨ－０２に一撃加えた。

「っ・・・」

Ｈ－０２は突然の反撃にバランスを崩し猛攻を止めた。

バーナビーはその隙にＨ－０２の背後に回り込み、腰に手を回した。

「ぬぅっ！」

そして全力でＨ－０２を持ち上げ、自らも一緒にビルから身を投げた。

「これで終わりだっ！」

バーナビーはＨ－０２を踏み台に、上にジャンプした。

〜ＧＯＯＤＬＵＣＫ・ＭＯＤＥ！〜

そしてグッドラックモードを発動し、重力のままに落ちていく。

「ハアアアアアっっ！！」

そして重力＋渾身の力＋ハンドレッドパワーの〝アトミックブレイク〟を喰らわせた。

Ｈ－０２からは空気摩擦で火花が散り始め、黒い装甲は紅く染まり始めた。

空中では自由に動けず、蹴りは完全に直撃している。

数秒後、凄まじい轟音と共に、地面に激突した。

煙が舞い、道路は抉れ、周囲はボロボロになった。

そして煙が晴れた瞬間、立っていたのは紅いヒーロースーツ。

その足元には黒い装甲が粉々に砕けて散らばっている。

バーナビーはヒーローマスクを外した。

「お前等の罪は、虎鉄さんの誇りを汚したことだ・・・」

バーナビーは自身の怒りの理由を静かに告げた。

Ｈ－０１との戦いの直前、バーナビーは敵の策略に嵌り、タイガーを敵と見なしていた。

その時、「操られている自分を助けるため」にタイガーはそこそこのダメージを追った。

そしてその闘いの後、バーナビーは思っていた。

〜もし、汚れた僕を虎鉄さんに差し向けた奴らに再び出会ったら、必ず倒す〜

そう、自分に誓っていたのだ。

「・・・・・・」

目の前で粉々になっているＨ－０２の残骸を、冷たい目で見つめたいた。

「お前等は、こんな事の為に造られたんじゃない・・・」

そう言い残し、ビルの壁を跳躍しながら屋上に戻った。

残り時間１分１０秒。

「お２人共、大丈夫ですか？」

バーナビーは休息をとっているキッドと折紙に話しかけた。

「うん、もう大丈夫」

「かたじけないでござる」

「じゃあ一度病院に行きましょう、お２人共軽いケガじゃないでしょう？」

残り時間５０秒。

「ううん、もう平気・・・」

キッドは立ち上がろうとしたが、膝から崩れてしまった。

「おっと、ホラ、やっぱり疲労がきてますよ」

バーナビーはキッドを受け止め、背に背負った。

「拙者は自分で行くでござる」

折紙も立ち上がった。

「それじゃ、行きましょう」

ビルを駆け降りるバーナビーの後に折紙も続いていく。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

その数分後。

同じビルの屋上の床が円形に歪んだ。

その歪みから1人の人間が出てきた。

「・・・誰も居ないじゃん」

艶やかな声でその人間は言った。

「まあ面倒がなくてイイけど・・・」

その人間は右手に握った紅いメモリのボタンを押した。

〜ＨＥＡＴ！〜

羽原レイカ。

克己の仲間である。

～憤怒のB／本物のバニー～（後書き）

・・・いえ。

本当はバニーがやられて、止めの瞬間にレイカが出てきて共闘。

という展開を考えていたのですが。

「あんまりバニーを負けさせるとモブキャラになっちゃう」

と思ったので勝たせました。

次回・吹き抜けるC／フィリップの切り札

～吹き抜けるC／フィリップの切り札～（前書き）

今回はオリジナルライダーの仮面ライダーサイクロンが活躍！

能力的には風を操るのでスカイハイと変わりません。

サイクロンＶＳＨ－０２

始まります。

～吹き抜けるC／フィリップの切り札～

？ワイルドタイガーの次元？

場所はビル群の立ち並ぶシュテルンビルトの街中。

「検索に該当なし・・・か・・・」

サイクロンは目の前のＨ－０２を見据えて言った。

その場にはフィリップが変身した仮面ライダーサイクロンと。

沈黙したまま動かないＨ－０２がいた。

他のヒーローの闘いから見て、相手が臨戦態勢にならない限りは攻撃してこないようだ。

そういうプログラムで造られているのだろう。

「まさか一件も検索がヒットしないなんて・・・興味深い・・・」

サイクロン、もといフィリップは〔星の本棚〕に入り、Ｈ－０２について検索していた。

しかし、Ｈ－０２に関しての情報は一件もヒットしなかった。

地球の記憶の全てを知るフィリップにも、極稀に情報がないモノがある。

Ｈ－０２はそれに含まれていた。

「オーズはもう他のヒーローの処に行ったかな・・・？」

相手が攻撃してこないのを良いことに、独り言のように話している。

オーズは数分前にここから立ち去った。

３枚の黄色いコアメダルを使い、別のコンボになり、猛スピードで消えたのだ。

それについては今は多くを語らない。

「幾つか質問をしたいんだが、いいかな？」

無言で佇むＨ－０２に、軽口で尋ねるサイクロン。

「言葉はわかるだろう？キミのような高性能ロボットが何故大量生産されているんだい？」

「・・・・・・」

何の応答もない。

「フム・・・どうやら必要なこと意外に会話をしないようだね」

サイクロンは言い終わるが早く、いきなり駆け出した。

「フッ！」

駆けた勢いのままにＨ－０２に右裏拳を叩き込む。

「・・・害意アリと判断、強制的に排除」

右裏拳を右手の甲で防いだＨ－０２は、戦闘態勢に入った。

「やはり、こちらの攻撃に反応するのか」

サイクロンは裏拳を素早く引っ込め、後退した。

しかしＨ－０２も前進し、蹴りを飛ばしてくる。

「おっと」

軽口だが、ギリギリでかわした。

決して余裕のある闘いではない。

「フッ、ハッ！」

次々に繰り出される蹴りを、流れるような動作でいなし、かわす。

仮面ライダーサイクロンはジョーカーと同様に、１本のガイアメモリの効果が増大される。

切り札の記憶を内包する｛ジョーカーメモリ｝のみで変身するジョーカーは、技のキレが格段に増す。

対してフィリップの扱う、疾風の記憶を内包する〔サイクロンメモリ〕

単体変身した場合、疾風の能力が極限まで高まる。

つまり、全体的な動きが通常より格段に速くなる。

それによりＨ－０２の蹴りを全てかわしている。

「ぐっ・・・！」

しかし、１発の蹴りがサイクロンの腹部を捉えた。

〔やはり・・・半端な強さじゃない・・・〕

メモリにより肉体の速さは上がるが、フィリップ自身の反応速度は変わらない。

相手の蹴りに反応できなければ、それまでの話。

「まだまださ！」

サイクロンは高く跳躍し、空中で静止した。

それは「飛んでいる」状態だった。

風を操れるサイクロンメモリなのだから、空を飛べるのも頷ける。

「キミの強度・・・見せてもらうよ」

サイクロンはドライバーからサイクロンメモリを引き抜いた。
そして腰に装着されているマキシマムスロットに装填した。

〜ＣＹＣＬＯＮＥ！ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ！〜

サイクロンメモリをによるマキシマムドライブを発動した。
本来は翔太郎の所有するジョーカーを含めた３本のメモリでマキシマムを行う。
実戦でサイクロンメモリのマキシマムを使った事のあるのは、照井だけだ。
サイクロンは今いる場所より更に上空へ飛び上がった。
「翔太郎風に技名をつけるなら・・・・・・」
そして超高速で地に向けて降下していく。
「サイクロン・マッハブラスト！！」
身体をドリルのように回転させながらの降下により、さらにスピードを増す。
そして真下のＨ－０２に向けて必殺の高速キックを叩き込んだ。

猛スピードによる回転も加わり、貫通力の増した蹴りが黒い装甲を抉り出す。

Ｈ－０２は真上からの攻撃をギリギリ両腕でガードしている。

しかしその両腕も徐々に砕けていく。

「ハッ！」

回転が弱まり、Ｈ－０２の腕を支えに空中で回転しつつ見事に着地した。

見直したＨ－０２の両腕は、黒の装甲はほとんど抉れ、内部機械も露出していた。

しかし、まだ動きを止めてはいない。

「マキシマムでも破壊しきれないのか・・・」

サイクロンメモリをドライバーに戻しつつ、深い息を吐く。

「恐るべき強度だ・・・・・」

サイクロンは隙を与える前に駆け出した。

「ハァッ！」

そのまま体を捻って回転し、飛び蹴りを放った。

Ｈ－０２はそれを千切かけの右腕でガードしたが、衝撃で右腕は吹

っ飛んでしまった。

「！」

サイクロンは驚愕し、考えるより早くビルの影に飛び込んだ。

ドドドドドドドドドドドドドッッッ！！！

Ｈ－０２の千切た右腕のマシンガンが火を吹く。

右腕の、肘辺りから漆黒のマシンガンが現れてサイクロンを狙い打っているのだ。

「まさか軍用兵器まで装備してるなんて・・・」

ビルの影で銃弾の雨をかわすサイクロン。

ダブルの時ならば、メタルメモリを使えば気にすることもなく攻撃できる。

しかし、単独変身の場合は例外である。

むしろサイクロンへの変身は、スピード以外の基礎スペックを全て下げてしまう。

事実上、防御力は低下しているのだ。

たとえただのマシンガンでも、今の装甲で喰らえばダメージは免れない。

依然として隙なくマシンガンを打ち続けるＨ－０２。

〜弾切れを待つしかない・・・〜

そう思った直後、銃弾の音が止んだ。

サイクロンはビルの影からＨ－０２の姿を確認した。

ドンッ！

瞬間、Ｈ－０２は右腕のマシンガンで千切かけの左腕を木っ端微塵にした。

「っ・・・！」

今度はサイクロンが居たビルの影が消えた。

Ｈ－０２の左腕から現れたキャノン砲が、ビルの壁を破壊したのだ。

「一体どれだけの武装を施されているんだ！？」

サイクロンはＨ－０２の目の前に姿を現した。

接近するのは危険に見えるが、飛び道具が相手ならば極端に近いほうが有利。

銃口が自分に向く前に、サイクロンは体術を駆使し攻撃する。

しかし、攻撃力は普段よりも低下している。

Ｈ－０２相手では全くと言っていいほど効いていない。

そしてＨ－０２はガラ空きのサイクロンの腹部目掛けて膝蹴りを叩き込んだ。

「ごはっ・・・！」

攻撃に集中していたサイクロンは、ダメージに膝をついた。

そんな隙を見逃すわけもなく、Ｈ－０２は左腕のキャノン砲の狙いを定めた。

「ぐあっ！！」

ノーガードで喰らったキャノン砲に、２０ｍ近く吹き飛ばされるサイクロン。

翠の装甲は、すでにボロボロだ。

〜このままでは・・・本当にやられる・・・・・・〜

サイクロンはメモリを引き抜き、マキシマムスロットに装填しようとしたが。

ギンッ！

放たれた１発の銃弾に弾かれ、彼方に飛んでいってしまった。

ゆっくりと近づいてくるＨ－０２。

その歩みはサイクロンの死を告げているようなものだ。

〝負けられない・・・鳴海壮吉との・・・約束・・・〟

軋む身体に鞭を打ち、サイクロンはゆっくりと立ち上がった。

しかし、すぐに膝をついて伏せた。

既に限界を超えるダメージを受けているのだ。

〝勝てない・・・のか・・・？〟

そんな考えが頭をよぎった瞬間。

グニャリ、と目の前の地面が円形に歪んだ。

見たことのあるその歪みから、1人の男が現れた。

「ああっ！やっと着いたか！」

強靭な肉体に、銀の棍棒、頭のバンダナ。

「キミは・・・ゴウゾウ・・・？」

サイクロンは男に向けてそう言った。

「ん？オメエか、克己の言ってたコッチの仲間ってのは」

「大道克己の・・・仲間？」

サイクロンがそう聞いた直後。

ドドドドドドドッッ！！

Ｈ－０２のマシンガンの銃声が会話をかき消した。

ギギギギギギギンッ！！

ゴウゾウと呼ばれた男が、銃弾を棍棒ですべて弾いた。

「危ねぇなぁ・・・・・・」

特に危機感もなくそう言った。

「おい。お前、名前は？」

「ボクは、フィリップだ」

「フィリップだな、そんでアイツは敵なんだよな？」

「その通りだ」

「それだけ分かりゃ十分だ」

ゴウゾウはロストドライバーを取り出し、腰に装着した。

そしてポケットから銀に輝くガイアメモリを取り出し、ボタンを押す。

〜ＭＥＴＡＬ！〜

メモリのガイアウィスパーからメモリ音声が再生される。

「変・身」

メタルメモリをドライバーに装填し、ドライバーを開く。

太鼓のようなダイナミックな音楽と共に、ゴウゾウの身体が銀の装甲に包まれる。

「いよし！コッチでも問題ねぇみたいだな」

少し体を動かし、Ｈ－０２に向き直り。

「仮面ライダーメタル」

確かにそう名乗った。

～吹き抜けるC／フィリップの切り札～（後書き）

どうも。

サイクロンとジョーカーがボロボロにやられたのには不満かもしれませんが・・・

それにより「ダブル」として戦うときの強力さを強調したいな、と思いまして。

「サイクロン・マッハブラスト」は完全オリジナルです。
〔ネーミングセンスは皆無です〕

次回・助っ人M／鋼鉄の闘士

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7975z/

仮面ライダーW&ＴＩＧＥＲ&ＢＵＮＮＹ

2012年1月13日21時45分発行